

自分で付ける渾名≡固有名？

ここ暫く、名前の文字表記を取り挙げて、その政治性を考察した。植民地主義と歩調を合わせるようにアフリカに進出したキリスト教のミッションナリーは、布教地の住民の言語の文字化をも競った。バイブルを土地の言葉に翻訳する事が布教の要石だと見たからである。ところが、各教派が個別に、しかも恣意的に採用した正書法の違いが、往々、それを用いる人々の独自の集団的アイデンティティの主張に結び付き、それまでは一体的だった人間集団を引き裂く重大な要因ともなったのである。

文字表記をめぐる「政治」は、もっと小さな単位、例えば日本の同名の同族団相互の関係や、更には親子や兄弟の間でも見られる。特に身近なところでは、昨今目につく、旧字体による苗字の差別化の傾向が思い浮かぶだろう。

少なからぬ渡辺さんが、渡邊さんや渡邊さんである事を主張し始めている。そして、文字表記上の自由度が苗字よりも遙かに高い個人名の領域では、文字の選択と組み合わせにあらん限りの想像力が動員される。まり、マリ、真理、眞理、真里、眞里、麻里、摩利、磨理、万里…。しかも、何と、人名漢字の読みは全く自由なのだ。父親たる者の最初の苦しみと楽しみは、こうした想像力を試される点にある。そして、アフリカでも事情は異ならない。ケニアのキプシギス人であるTaita Towet氏が、Taaitta Towetと自分の名前を表記し始めている。それらが或る種の自己主張である事は間違いない。

■苗字と個人名

ところで、上に見たような「政治」性には、二つの側面を見えておく必要がある。

まず、渡辺を渡邊の表記に変える事が或る種の自己主張であるとしても、渡邊某氏個人がその渡邊一族の一員であるという社会関係から抜

け出せるわけではない。この文字表記の変更は、渡邊某氏を渡辺さん一般から区別するが、一方では、狭く特定された渡邊さんたちにより強く関係付ける事にもなる。この場合はむしろ、そうした効果を求めている、渡邊某氏個人の固有性を主張しているのではないだろう。そうした事情は、前回紹介した、国東半島の同名の二つの同族団の伝説の政治学に明確に読み取れた。

一方、まり、マリ、真理…という表記は、この女性が他のどの個人でもないという固有性の主張である。しかしながら、この場合にも「まり」さんは、父親（たち）によって命名されるのだ。その父親が「まり」さんの固有性を表現する意図は、他でもなく、実の親子関係の誇示にある。つまり、この場合、「まり」さんの固有性を特定する強度は、社会関係を表現する動機の強度によって裏打ちされているのだ。

言い換えれば、他者によって命名される限り、どのような固有性の主張も、命名者との社会的な関係に繋ぎ留められる結果になる。

■無意味な名前はあるか

だから、固有名詞は、どの程度であれ記述的な性質をもってしまいう以上、結局は普通名詞なのだという議論がある。すると、人の名前が真に固有名詞であるには、特定の個人と結び付く事実以外に何も意味しないものである事が理想的だといえる。人類学者ギアツによれば、バリ島の庶民の本名である個人名は、口にする事が厳しく忌避されているばかりでなく、全く意味のない一語でできているという [Geertz, C., *The Interpretation of Cultures*, 1973]。すると、それは記号として数字に近付くことにもなる。

では、バリ島の庶民の本名は、真に固有名と呼ぶに相応しいのか。ここで思い出すのが、コンゴ中央部の熱帯雨林地帯に住むバントゥ語系

の焼畑農耕民であるボンガンド人の名前に関連して、木村大治が展開した議論である。彼は、でたらめにキーボードを叩いて作ったcoioeyfscuという全く無意味な名前を考察して、次のように結論付けた。「名前が外見上『記述』ではない、“coioeyfscu”のようなものであったとしても、それが他者によって名付けられ、かつその名付けが社会的に広く承認されているのであれば、その名を用いることはつねに、名前のもつ社会性を呼び起こすことになる」、と〔木村大治「ボンガンドにおける個人名」、『アジア・アフリカ言語文化研究』52、1996〕。

■名付けという暴力

このように名付けという行為は、名付ける者と名付けられる者との間に否応なく社会的な関係を作り出してしまふ。それゆえ、出口頭は一切の名付けは権力的な行為であると述べた〔出口頭『名前のアルケオロジー』、1995〕。また、J. デリダは、命名とは根源的な暴力だが、その暴力性は名前を用いることが禁止される事によって隠されていると考えた〔デリダ J., 『根源のかなたに』、1972〕。実際、世界の数多くの民族に本名を使う事を恐れて忌避する慣行があるという事実が知られている〔穂積陳重『実名敬忌俗研究』、1926〕。忌避される理由は、ほぼ何処でも、本名を知られると存在の本質を相手に捕捉され、支配されてしまうからだと言われている。これを本稿の文脈で解釈し直せば、本来固有名詞であるべき本名も、口にされた途端に何らかの社会性の刻印が認知され、普通名詞であると感じられてしまうからだといえる。

いずれにせよ、個人名（本名）を固有名詞に可能な限り近付ける一つの方法は、それを口にすることをタブーにする事だ。しかも、バリ島のように、個人名が無意味であればもっといい。

これは、多くの民族に見られる伝統的な方法である。一方木村は、前述の論文で、ボンガンドの命名システムの中に、これに代わるもう一つの可能性を見いだして検討を加えている。

■いい加減さの戦略

ボンガンド人は、「本名」、キリスト教名、「父の名」、渾名、太鼓名、踊りの名、冗談関係の名など、実に多彩な名前をもっている。しかも、渾名は一つではない。木村が殊に注目するのは、「思わず苦笑してしまうような（中略）新奇な言語世界の要素を、手当たり次第に取り入れている〔Aristotle, Jean-Jacques Rousseau, Newton, Pel'e, Himalaya, Pacifique, Air Congo, PetroZaire, Virus, Larousse, Horizon, Irrégulier…〕等、ボンガント人が自分で付けた渾名である。

その特徴は、名付けの根拠が極めていい加減な事だ。キリスト教名も「ハイカラな」名前として自分勝手に付ける点では同じで、キリスト教の教義に繋ぎ留められる重さをもたない。ただ、自分で付ける渾名は突拍子もないがゆえに、他者と同名関係になる事から生じる社会的な拘束性さえも免れている。しかも、渾名は頻繁に変えられるものの、呼びかけ名（address）として社会的に通用し、「私的な名前」に陥ることを危うく逃れている〔木村、前掲書〕。

さて、木村は、オーバタケンを主語とする文は私（大庭健）以外の誰にも語れるが、「私」を主語とする文は私（大庭健）によってしか語れないのだから、他の誰でもない、今ここに存在を指示する固有名詞は「私」でしかないという大庭健の主張を引用する。その一方で、誰もが「私」という主語をもつ社会は現実には存在しないという当然の事実にも触れる。そして、ボンガンド人のいい加減で、固有名から一見最も遠そうなこれらの名前に、「どのような記述によっても限定されない、ほかならぬこの『私』を示そうという、彼らの願望」が垣間見えると言っている〔前掲書〕。木村の考察は、人々の「私」をめぐる不完全でも柔軟な、それゆえに現実的で、しかも広く一般性を持ち得る対応を描き出して実に興味い。芸名や筆名もこの視点から再考できそうだ。

（こんま とおる 神奈川大学 社会人類学）